
ウルトラマンシャイン

Hikari

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンシャイン

【Nコード】

N7990X

【作者名】

Hikari

【あらすじ】

主人公光輝^{ひつぎ}はある日、
登校している途中で知らない場所に行ってしまう。(知らぬ間に転生)

そこはなんと光の国だった。

プラズマスパークの力により超人化してしまった主人公は宇宙警備隊に入ることを決意する。

11/25(金)より話を全て書き直しています。第5部まで完了

しました。

ストーリーは変わってませんが、

大幅に変わっているのもあるので読み直すことをお勧めします。

11/26(土) 第10部まで改正しました。

11/27(日) 第13部まで改正しました。

連載再開します。

転生？（前書き）

改正版です

転生？

「じつぎー 早くしなさい。」

一階から母さんの声がする。

「はいはい わかったわかった。」

見ての通り遅刻寸前だ。

ダダダダダ

シャーーーーーッ！

バタンッ！

「もっと静かに下りなさい。」

「はいはい　じゃ　行ってきますー!」

ガチャ

「弁当は!?!?!」

「っと、忘れてた。」

バツ

「じゃ今度こそ行ってきますー!?!」

ダダダダダ

「やっべえ　急がねーと遅れんなこりゃ。」

あ　どうもどうも読者の皆さんこんにちは。
私は光輝と申します。

えっ?

これは小説で一番しちゃいけないことだって?
大丈夫、これは俺の妄想。

此処は何処なんだ？

超周りが歪んで見える。

もしかしてこれって転生？

神様とか出てくるの？

ゴゴゴゴゴゴゴ

もしかして、

「またかよおお!!!!」

また俺は何かに吸い込まれた。

「うーん」

今度こそは何処だ？

俺は周りを確認しようとして目を開けた。

「うってまぶしっ!?!」

ヤバいまぶたごしに分かる。

目が焼けるようだったてか体が何か熱い。

俺は気を失った。

今若い青年が星に降り立とうとしていた。

「此方メビウス帰還します。」

『了解ご苦労だった。』

この青年は地球人とは思えない銀と赤の体をしていた。
そうウルトラマンである。

「!?!? いきなりなんだ?」

いきなり近くの丘で何かがひかったのである。

「行っって見るか。」

行つて見ると光はすでに収まっていた。
しかしそこには、

「人？なんでこんな所で寝ているんだ？」

其処には地球人でいう15歳くらいの少年が寝ていた。

「まあいい一度本部まで運んでから事情を聞かか。」

彼は寝ている少年を運び出すと、何処かへ飛んで行った。

その少年が寝ていた場所は、

光輝がさつきまで倒れていた場所と同じだった。

タロウと対面（前書き）

改正版です。

タロウと対面

「調査の結果はどうだった？」

「少しマイナスエネルギーが検知されただけで異常はありませんでした。」

「そうかご苦労だった。」

これって行つといた方がいいのかなあ

「ん？どうしたんだ？」

「実はですね、プラズマスパークの近くの丘がいきなり光ったんですよ。」

「それで？」

「で不思議に思ったんで見に行つたんですよ。そしたら其処に人が寝ていたんですよ。」

「何？其処は立ち入り禁止な筈だぞ？何処のどいつだ？」

「それがですね、住民表を調べたのですが、」

「何？載っていない？」

とにかく会わせてくれないか。」

「分かりました。此方です。」

んーよく寝た、

「それにしても変な夢だったなあ。俺が転生するとか。」

さて起きるか。

ん？

光輝「ここどこ！？」

見たことねえ天井に部屋。何？誘拐？

「此処は地球じゃないのぉ!!!???」

「君は何を言っているんだ?ここはウルトラの星だぞ?」

「じゃあ君は地球から来たというのかね?」

「はい。」

「でしかもその世界にはウルトラマンは存在しないと・・・」

たしかにさっきの驚き様からして嘘ではないかもしれないな。

「でも君は我々と同じ姿をしているのだが?」

「えっ? ホントだ何で?」

確認してみると手は銀色だし、何で気付かなかったんだろ。」

「君が地球人だしよう。どうやって此处に来たんだ？」

「なんかよくわかんないグニャグニャした空間に飛ばされて、気付いたら此处に、
で意識が戻って目を開けようとしたら眩しくて急に体が燃えるように熱くなって。」

タロウは少し考えてからこう言った。

タロウ『一回検査してみよう。そうすれば君が何故我々と同じ姿をしているのかも分かるだろう』

そして俺は検査を受ける事になった。

「じゃあ、早速検査しよう。」

検査の内容はDNAの検査などだった。

「検査の結果は明日には出るから。

さっきの部屋で寝てていいよ。」

グルグルルルル

「すみませんお腹が・・・」

「ははは僕もすっかり忘れていたよ。

よしご飯食べよう。」

ウルトラマン達の食べるご飯は割りと普通だった。

眠くなったので僕は部屋に戻り寝た。

検査結果と今後について（前書き）

改正版です。

検査結果と今後について

次の日

トントン

「入ってもいいか？」

「はい、どうぞ。」

ガチャ

「早速だがこれが検査結果だ。」

そう言つてタロウは検査結果の紙を見せてくれた。

これが検査して分かつた事だ。

僕の体はプラズマスパークの力、正確にはディファレーター因子を含んだ光線を浴びた事により肉体が変化したつてこと。

ウルトラマン達の先祖達もこの光を浴びた事により今の姿になつたらしい。

「でどつする？」

「何をですか？」

「決まってるだろ。今後についてだ。」

「君は異世界から来たんだ、帰る場所もない。」

「あつ確かに」

「そうだったー帰るところねえーじゃん。どうしよう……」

「そつだ……」

「俺を警備隊に入れてください……」

「せつかくウルトラマンになったんだ。カッコいいことしてえし。」

「警備隊の仕事は危険を伴うがいいのか？」

「はい、此処に来たのも、この姿になったのも、何か理由があると思つんです。」

「警備隊に入れば何か分かるかも知れないし。」

「分かつた。それなら話が早い、」

「君を訓練生として登録しよう。」

「ところで君の名前は？」

確かに今まで気になんなかったけど自己紹介してねえや。

「俺は光輝っていいいます。」

でもウルトラマンコウキってなんか変だから名前変えていいですか？」

「コウキでも別にいいと思うが変えたいなら自由にしていると思うぞ」

んじゃどうしようかなあー光だからライト？は変だし、

輝くはシャイニングだからシャイン

ウルトラマンシャイン

おっ結構カツコよくな？

「シャインなんてどうですか？」

「いいんじゃないか？」

こうして俺はシャインとして宇宙警備隊の訓練生となった。

それと僕はこの星のことを知らないためタロウやメビウスが暇な時に教えて貰う事になった

で今はメビウスに教えて貰っている。

「ウルトラの星は27万年前に太陽が爆発して死の星になる寸前になったんだ。」

「これがプラズマスパークタワーを作った理由ですね。」

「そうだよ、その時建設に関わったのがウルトラマンキングで・・・」

その後も色々教えて貰った。ディファレーター光線とかウルトラの父の功績とか。

「そっぴゃあタロウ教官が明日、
身体能力の測定するって伝えといてくれて。」

「分かりました。ありがとうございます。」

検査結果と今後について（後書き）

キングが開発したってのは僕の想像です。

人物紹介 設定(前書き)

改訂版です

人物紹介 設定

この物語の世界は原作「ウルトラマンメビウス」の数年後です。

光輝こうき

この物語の主人公

身長168cm 体重47kg

好きなもの 特撮（特にウルトラマン） 因みにウルトラマンヒカリが一番好き。

嫌いなもの 可愛くもないのに調子に乗った女子

ウルトラマンシャイン

身長38m 体重27000t

光輝がプラズマスパークの光により肉体が変化した姿。

銀色族

ウルトラマンメビウス

身長49m 体重35000t

超人化した光輝を運んだ。

かつて地球を守ったウルトラマンの1人

ウルトラマンタロウ

身長53m 体重55000t

ウルトラの父、母の実の息子でありメビウスの教官。

かつて地球を守ったウルトラマンの1人。

プラズマスパーク

正式名称 プラズマスパーク核融合装置。

ウルトラの星の人工太陽。

ウルトラの星の人間はこの装置から発せられるディファレーター因子を含んだ光線により超人へと進化した。
開発したのはウルトラマンキング。

宇宙警備隊

ウルトラの星だけでなく全宇宙を守る組織。

「この力を得た我々には宇宙を守る義務がある」とウルトラの父により3万年前作られた。

大隊長

ウルトラの父

隊長

ゾフィー

ウルトラ兄弟

タロウ達

隊員

隊員候補

訓練生

シャインは此処

人物紹介 設定（後書き）

シャインの身長、体重は増えていく予定です。

シャインの能力

「Set・・・Go!!!」

「うおおおおー!!!」

今、俺は身体能力の測定をしている。
分かりやすく言うとスポーツテストだ。
分かったこと、この体はチート。

「うおりゃあー!!!」

腕力は180000tのタンカーを持ち上げられる（因みにウルトラマンとレオは200000t）でも何でタンカー何だろう？

「うおおおおー!!!」

地上をマツハ1.5（時速1836km）で走れる）80が1700km（

「とっっー!!!」

ジャンプ力は1跳び1200m（レオは1000m）

「デュアー!!!」

マツハ22（時速26928km）で飛行可能（タロウはマツハ20）

「うおおおおおー!!!」

600ノットの速さで水中を移動（80は630ノット）

つまり、現時点でほぼ全員のウルトラ戦士並みの身体能力を持っている言うこと（計る度タロウの口が開いた）

しかし、全てのウルトラ戦士を下回るものがあつた。

それは………ウルトラマンの代名詞「光線」である。
全く出せないのだ。

体にエネルギーを運びさせて強化したりするのは可能で、エネルギーはタロウ達の何十倍もあるらしのだが。
タロウは、

「大丈夫、ガーディアン守護隊の人達も光線撃てないから。」

超ショックだった。落ち込んでいるとタロウが、

「体のエネルギーを光線に変える武器が作れるよ。」

と教えてくれた。

そついやあヒカリのナイトブレスはそんな機能だったか。
しかし、それは高価なので正式に隊員になったらプレゼントしてくれると約束してくれた。

「よっしゃー訓練がんばるぞー!!!」

なんだかテンション上がった来たわ

「はははは（苦笑）」

こうして俺の修行がスタートした。

シャインの能力（後書き）

そうですチート（欠点あり）とはこのことです。

80ってタロウより足が速いんですねー。

ガディアン 守護隊は漫画「ウルトラマン ストーリー STORY」ゼロ「0」に出てくる主に光の国を守る特殊部隊です。

修行（前書き）

改正版です。

修行

身体能力の測定から数日。

俺は鎧に身を包んでいた、テクターギアだ。タロウが「お前の力は素人には強力過ぎる。」と装着させた。試作品らしくてどれぐらいの完成度か実戦で試したいらしい。

にしても重いし力が入らない、
こんなの着けてゼロは修行していたんだと思うと感心しちゃうね。

そして今、タロウと俺は向き合い、
修行を始めようとしていた。

「さあ始めよう。いつでもいい……！」

「じゃあいくぜ……！でりゃあ……！」

シャインは、拳にエネルギーを込め殴りかかる。
がしかしタロウはあっさりかわす。

ドゴーン……！

シャインのパンチは、タロウのいた場所にあった岩を砕いた。

「ほうテクターギアをつけていてもそれほどのパワーが出せるとは。」

「だが、

「そんなんではただの喧嘩と同じだ。」

タロウはシャインの背後にまわり。

「ふんっ！！」

ゴッ

タロウの蹴りがシャインを吹っ飛ばす。

ズザアアア！！！！

「チッ、もう一度だ！！！」

またパンチを放つが……

スカッ

「くっそおー！！何で当たんねえんだ。」

「集中力だ!!集中が足りん!!
そんなんじゃ隊員になれんぞ、もっと相手を見るんだ!!」

「相手を・・・よく見る・・・か。」

「考えてる場合じゃないぞ!!」

「ダッ!!ガッ!!」

タロウの集中攻撃が続く。

「くっそ!!!!」

ブウン

シャインは反撃しようとして腕を振るうが、
またもやタロウにかわされる。

シャインは間合いを詰め回し蹴りをした。

「遅い!!」

スカッ

だがシャインには見えていた。タロウが背後にまわってシャインに
パンチしようとするのを・・・

「なっ!?!」

ガッ!!

タロウは蹴られる時に後ろに跳び衝撃を減らした。

「俺の動きを読んだか。」

シャインがタロウの動きを読んで後ろに蹴りを入れたのである。

わざと攻撃パターンを同じにしてみたが、
驚いたなもう反応するとは、

「中々やるじゃないか。今の感覚をすっかり覚えるんだぞ!!」

こんなに呑み込みが早いと将来が楽しみだな

「さあ続けようか。」

「おっっ!!!!」

シャインの修行は続く。

入隊（前書き）

改正版です。

入隊

修行開始から5年、俺は隊員候補にまでなった。

そして俺の修行も終盤を迎えた。

自慢じゃないが必殺技も出来た。

「シャイニングクロス?!?!」

ガッ

シューーーーン!!!

シャイニングクロス。

空中に浮かんだ2つの光のカッターを回し蹴りの要領で蹴り相手を左右から攻撃する技だ。

ガキンッ!!!

しかしタロウには防がれてしまった。

え?なんでカッターを出せるかって?

それは修行の成果。

ではなく俺はウルトラブレスレットを2つ使っているからだ。

2つはズルい？まあいいじゃん。

「ストリウム光線？！！！！」

「うわっ。」

ドォーン

タロウも光線使ったりと少しは本気を出してくれるようになった。

「あゝあ、また壊しちゃった。

これで136個目だよ。」

「そのぐらい大丈夫だよ中古だから、金も余ってるし。」

「えっ？中古なんて売ってるの！？」

今日の修行が終わった後、タロウ教官に呼び出された。

「タロウ教官、何でしょうか？」

タロウが俺の師匠になってからメビウスの真似してそう呼ぶようになった。

「そろそろお前を訓練生から卒業させようと思う。」

「本当ですか!?!」

「そうだ。後はもう実戦で学ぶしかないと思ってな。」

こうして俺の卒業& a m p ·正式に入隊が決まった。

数日後 入隊式

「大隊長より挨拶」

「おめでとう。君は今日から警備隊員の一人だ。警備隊には危険な任務が多い、覚悟は出来てるな?」

「ハイっ!!!」

「次にカラータイマーの贈呈です。」

俺の胸にカラータイマーが取り付けられた。なんかウルトラマンに一步近付いた感じ。

式の後

あつメビウスがいる。

彼も此方に気付いたらしく近づいて来た。

「おめでとつ。」

「有り難うございます。」

「そついやあ、君を本部まで運んだのはメビウスだったな。」

「そつだったんですか？」

「うん、でもまさか僕が拾って来た君が立派な宇宙警備隊員になるとは思わなかったよ。」

「ははは（苦笑） 確かにそうですね。」

「じゃそろそろ行くね。 じゃあ失礼します、タロウ教官。」

そう言うと彼は立ち去った。

「おっといけない忘れるところだった。」

タロウは急に思い出したように箱を取り出し、俺に渡した。

「これってもしかして……」

「約束だからな。」

「ありがとうございます!!」

うるっ　　何だか泣けてきた。

「なんだよ、泣くことないじゃないか。」

「あっあの、開けてもいいですか?」

「もちろんだ。」

パカッ

開けると中にはブレスレットが2つ入っていた。

「それはお前の為だけに作ったシャイニングブレスレットだ。ウルトラブレスレットの強化版でそれにお前の望んでいた光線を撃てるようにするエネルギー変換装置を付けておいた。」

俺は早速シャイニングブレスレットを着けてみた。

「因みにお前の膨大なパワーを制御する装置を付けておいた。
ミニテクターギア的なものだ。
来るべき戦いの時に解除すればいい。」

「ハイっ！！いろいろ有り難うございました！！！！」

「ではゆけっ！！シャイン！！」

この日、1人の勇者が旅立った。

「タロウ、お前に聞きたいことがある。」

父さんに呼ばれたので行ってみると父さんは真剣な表情をしていた。

「シャインについて何だが、

住民の登録がないし能力も異常に高い。」

「彼は異世界の地球人です。」

「異世界の！？次元を越えてきたのか。
そして彼が我々と同じ姿をしているという事はディファレーター光
線の影響を受けたと言うことか？」

「おそらく、もしかしたらこれから何か起こるのかもしれない。」

「様子を見るしかないなあ・・・」

「はい・・・」

入隊（後書き）

入隊式ってどんな感じなんだろう。

カラータイマーの設定は映画「大怪獣バトルウルトラ銀河伝説」に合わせてました。

初めての任務（前書き）

第2章突入です。

いよいよ本格的なストーリーがスタートします。

改正版ですがほとんど変えてません。

初めての任務

「タロウ教官前に調べていた惑星シグマから異常なマイナスエネルギーを感知しました。」

「そうかあの時は前触れだったか。」

「彼に行かせて見ては？」

「そうするか。」

俺が警備隊員になってから数ヶ月たったある日、俺にとって初めての任務が来た。

「異常な量のマイナスエネルギー!？」

ある惑星で異常な量のマイナスエネルギーが検知されたらしい。

「そうだ。何か嫌な予感がするんだ、怨念の様な何かが・・・」

「怨念・・・」

「危険な任務になるに違いない。何かあったらウルトラサインを送るんだぞ。」

「ハイっ!!」

こうして俺はそのマイナスエネルギーが感知された惑星へと向かった。

ここは惑星シグマ、光の国からかなり離れた星だ。

この星に近づくまで気づかなかったが、

確かに怨念の様などてつもなく深い闇の力が感じられる。

「降りて探索するしかねえか。」

その様子をモニターで監視している者がいた。

「光ノ戦士ガ侵入シタ。タダチニ排除セヨ。」

『ピロロロロ、ゼットン』

勢いよく飛び出していくゼットンを見つめながら呟いた

「後少シダ、後少シデ蘇ル・・・」

声の主は視線を移した。

その視線の先には有り得ない異形の怪獣が封印されていた。

初の戦闘（前書き）

戦闘描写って難しい。

改正版です

初の戦闘

辺りを探索して1時間、
惑星シグマはどうやら死の星の様だ。
半径10km以内に生命反応はない。では何故？

!?

急に生命反応が現れた。

前言撤回、この星には少なくとも・・・

「怪獣はいる!!」

俺は左に跳び火球を避けた。

ドガン!!

外れた火球は地面をえぐった。

そしてこの星には宇宙人もいるはずだ。

ゼットンには生物兵器だ野生でいるはずがない。

「ゼットンがマイナスエネルギーの正体なのか？」

いやゼットンからはマイナスエネルギーは感じられない。

「こいつの目的はなんなんだ？」

まあ今は戦うしかないか。

「でもどうやって倒せばいいんだ？」

ゼットンには1兆度の火球やゼットン光弾、電磁バリアー、テレポーターションが使える厄介な相手だ。どうしようか。

「ゼットン」

ブウォン！！

また火球だ。またもや横に跳んで避ける。

ゼットンの弱点って何だっけ？

ゼットンの弱点ゼットンの弱点。

思い出せねえ、自力で探すしかねえか。

「シャイニングスパーク！！」

光のカッターがゼットンを襲う。

シャッ

ゼットンは止まりバリアを張る。

ガキンッ

バリアーを解除するとゼットン光弾を撃ってきた。

シュバウンッ シュバウンッ シュバウンッ

俺は間一髪、三発とも側転して避けた。

俺は一回飛んで空から様子を見ることにした。(ゼットンは飛行能力がない。)

光弾をよけながらウルトラスパークで攻撃する。
が、やはりバリアーで弾かれた。

「あれをやってみるか。」

“あれ”とは光線の事だ。しかしエネルギーの消費は控えたいためエネルギーの効率のいいカッター状光線にしておく。

「シャイニングカッター?!?!」

シュッ!!シュッ!!シュッ!!

真上から放たれた3つのカッターがゼットンに迫る。

ゼットンはバリアーを張りガードする。 が当たった。

「そうだゼットンの弱点は頭上だ!!」

ゼットンはバリアーは頭上だけ張られてないため、

シャイニングスパークと違い真っ直ぐ飛ぶ光線は当たったというわけだ。

ゼットンには攻撃が当たり混乱しているようだ。

ただどおかしいな、ゼットンには感情などが無いから混乱なんかしないんじゃない？

でも今はそんなことを考えている暇はない。

「今がチャンスだ。」

「シャイニングスパーク?!?!」

ゼットンに向けシャイニングスパークを放った。

ドババババーン!!!!

ゼットンは跡形もなく碎け散った。

「惜しい戦力ヲ失ツタ。マァイイ奴ハ兵器トシテハ不完全ダ。ドウセ“コイツ”?ノ訓練ノ相手ニスル予定ダツタノダ、別ノヲ用意スレバイイ。」

「ゼットンが確かこっちから来たんだよな、こっちに行ってみれば何か分かるかな？」

ゼットンが現れたってことは、もっとヤバいのが居るかもしれないな。

でも、

「やるしかねえか。」

初の戦闘（後書き）

誤字脱字や意見感想等があれば教えて下さい。

人物紹介 設定 2 (前書き)

改正

人物紹介 設定 2

登場人物

ウルトラマンシャイン

> i 3 3 6 4 4 — 4 2 3 8 <

> i 3 3 6 1 9 — 4 2 3 8 <

(あくまでイメージ)

身長 転生時 3 5 m 現在 4 2 m

体重 転生時 2 5 0 0 0 t 現在 3 2 0 0 0 t

光輝の転生後（正確には肉体変化した後）の姿。

能力がとても高いが、他のウルトラマン達と違い、光線が使えない。タロウから授かったシャインングブレスレットのおかげで光線を撃てる様になったが、他のウルトラマン達よりもエネルギーの消費量が多いためあまり使わない。

必殺技

シャインングスパーク

ウルトラスパークとよく似ていて脳波によりコントロール可能。光線の代わりにシャインがよく使う。ゼットン戦で使用。

シャインングクロス

シャイニングスパークを相手に向かって回し蹴りの要領で蹴って飛ばし攻撃する。
セブンのウルトラノック戦法を応用したゼロの技のパクリ。
タロウとの訓練にて使用。

シャイニングカッター

三日月状のカッター光線。
連続発射可能で真っ直ぐ飛ぶ。
ゼットン戦で使用。

武器

シャイニングブレスレット

シャインの為にタロウが、ウルトラブレスレットを強化改良した。
光線の撃てないシャインの為に光線が撃てる様になるエネルギー変換装置が入っていて、
シャインの膨大なパワーを押さえる機能もある。
ブレスレットの原動力はシャインのエネルギー。

カラータイマー

宇宙警備隊員などウルトラの星以外で活動する人達に付けられる。
エネルギーの残量を知らせる他エネルギー給油にも使う。

あくまでイメージなので違うんじゃないかこっちのほうがいいと
思う様なものがあれば教えて下さい。

基地発見（前書き）

改正版です。

基地発見

「奴が来ル。」

早く対策ヲ取ラネバ。

シャインは岩だらけの中に一ヶ所だけ不自然な金属で出来た扉を見つけた。

「ここか？」

間違いない。物凄い量のマイナスエネルギーを感じる。

「さてどうしようか、突っ込んでみるか？それとも・・・」

！？

「キシヤーツ」

金属の扉が開きゴモラが現れた。

「向こうの方から来てくれたか。」

シャインは踏み込み、間合いを詰め、エネルギーを込めたパンチを放つ。

しかしゴモラにはあまり効いていないようだ。

ブウン！！

ゴモラの尻尾がシャインに迫る。

ガッ！！

シャインはそれを受け止めた。

！？

「うわぁー！？」

その時シャインの体が持ち上がり、

ドガン

「ぐっ!!」

岩に叩きつけられた。

「クソっ!!なんてパワーだ。奴は遠距離技がない一旦距離を取るか。」

シャインは後ろに跳び距離をとる。

「確かウルトラマンと戦った時、尻尾切られて弱くなっただっけ? ならっ“スラツシュバインド?!”」

ウン!!

クルツ ボン

紐状のビームがゴモラの尻尾に巻き付き切断した。

「よしっ。」

そしてゴモラに蹴りを入れる。

ズガン!!

今度は吹っ飛びゴモラは岩に突っ込んだ。

「ギシャー!!」

ゴモラはかなり怒っているようだ。

「とどめだ!!」

シャインは腕にエネルギーを込めパンチを放った。
がゴモラは地面に逃げようとする。

「何!? 逃がすか!! “シャイニングカッター?!!!!!!”」

光のカッターはゴモラの足に命中し動きを止めた。

「今度こそ決めてやる!!」

“シャイニングナックル?!!!!”」

ガッ!!!!!!

ズウン!!!!

ゴモラは地面にめり込んだ。

「やったか?」

ゴモラはピクリとも動かない。

その時背後から見ていた者がいた。

基地発見（後書き）

背後に居た者とは？
続きます。

強大な闇（前書き）

改正版です。

強大な闇

「流石ダ。不完全体デハアルガ、アノゼットンヲ殺ツタダケハアル。」

そう言いながら背後から現れたのは、

「ジェロニモン！？お前が原因か？」

そう、現れたのは怪獣しゅう長ジェロニモンだった。

「ソウダ。マイナスエネルギーニ気ツイテ此処マデ来タ事ハ誉メテヤロウ。」

ダガモウ遅イ、怨念ガ造リ出シタ最凶ノ怪獣八目覚メタ。」

「何だと！？」

「サア現ロ！タイラントオオ！！！！」

ゴゴゴゴゴゴ グラグラグラグラ

「ギャシャアアアア！！！！」

基地の壁を突き破りタイラントは現れた。

テレビで見たのはそんなに強く無さそうだったのに、
何だ？あの怪獣から発せられる圧倒的なパワーは、

「こんなのにな勝てるのか？」

「ギイシエエー！！！」

タイラントは雄叫びを上げ右腕の大きな鎌で攻撃してきた。

「くっ！！！」

シャインは後ろに跳び避けた。

しかし、

！？

「なっ！？斬撃波だと！？」

シャインは避けられず咄嗟に腕を交差してガードした。

「ドウダ？コレが今マデ溜メテキタ怨念ノカダ。」

強大な闇（後書き）

とても短くてすいません。

改正しましたがほぼ変わっていません。

VSタイラント（前書き）

遅くなりました。定期テストだったんです。これホントなんだけど正直に言っと

「ストーリー決まってるけど進め方わかんねえ！！」

まあそんなわけで初心者の僕を許してください。

それともう一つ

「サブタイトル思いつかねえ！！」

改訂版です。

V S タイラント

ドウオーン!!!

「ぐはっ!!!」

俺超ピンチなんですけど!!

グル　グルルルル

!?

いきなりタイラントの動きが止まった……

かと思いきや……

キュイイイイン!!

「吸引アトラクタースパウト!?
俺を食おうってか?」

そつさっきの音は鳴き声ではなく腹の音だったのである。

タンツッ!!

シャインはギリギリで避け、

タイラントはシャインの後ろにあったゴモラの死体を呑み込んだ。

「危ねえ、呑み込まれるところだった。」

「タイラント何ヲシテイル!!早く殺レ!!」

タイラントはそれを聞き此方を向くかと思いきや、

「ヤ、ヤメロ!!グアアア!!」

!?

ジェロニモンを吸収し始めた。

パツクン

「仲間を食べた?」

「仲間ダト?笑ワセル。奴八俺様が復活スル道具ニ過ギナイ。」

其処にはゴモラの足とジェロニモンの羽を合わせ持った異形としか
言い様のない怪物がいた。

「EXタイラント!?!」

そうタイラントはEXタイラントに進化したのである。

「サア楽シマセロ、貴様ラ光ノ戦士ヘノ復讐ノ時ダ!?!」

タイラントはジェロニモンの声でそう言うと鎌を振った。

「まずいつ!?!?!」

ブウン!?!!

「がはっ。」

ズドーン!?!?!

岩にぶつかるシャイン。

「なんだこのパワーは今までとは比べ物になんねえ。」

「ソリヤソーダ。奴ガ溜メコンダ怨念ノパワーヲ取り込ンダンダ。サア続キヲシヨウジャネーカ。」

「くそっ、やってやるっじゃねーか!?!?!」

ダッ!?!

「ソウ来ナクチャ面白クネエ。」

がしっ！！！

「うっ。」

「モウ終ワリカア？光ノ戦士モタイシタコトネエナ。」

シャインはタイラントの腕の鎖に捕まってしまっていた。

「ぐっ（なんとかしねえと死ぬ）。」

VSタイラント（後書き）

タイラントなんだかヤプールっぽいな。

エネルギー解放

「グハハハハ 光^{ウルトラマン}ノ戦士ナド俺様ノ手ニカカレバ赤子ノ様ナモノダ。」

「ぐあああ。」

タイラントの腕の鎖がシャインを締め上げる。

「ソロソロ終ワリニスルカ。」

タイラントが鎌を振り上げる。

「んぎゃあ。」

シャイン首に巻き付いた鎖を握り力を入れる。

バキバキ

「何！？鎖ガ！！！」

「ハアハア よっしやあ 抜けたあ。」

「ダガ、体力ハ限界ノ様ダナ。」

ピコン ピコン ピコン

「くっ！！！」

「スグニ楽ニシテヤロウ。死ネ！！！！」

「フルパワーヘルマグマ”！！！！”」

「うわっ！！」

ブラックキングのヘルマグマを使えるのか！？
そんなの知らないぞ！？

「チツ避ケタカ。」

「ダガ、驚イタダロウ。怨念ノ力チカラニヨリ、
全テノパ―ツノ怪獣ノ能力ガ使エルノダ。」

タイラントは今度はしっかりと狙いを定めた。

「次ハ外サナイ、息ノネヲ止メテヤル。」

くっ どうすれば！！

次のが当たれば確実に俺は死ぬ。

『来るべき戦いの時に解除するといひ。』

はっ そうだ！！！！

「グハハハ、ドウシタ？家族ノ顔デモ思イ出シタカ？」

「まあね、師匠の顔をちよつとね。」

「ジャアソロソロ死ネ！！！！」

「ハイブリットヘルサイクロン?!?!?!」

口からの火炎と腹からの冷気の竜巻がシャインめがけて一直線に迫っていく。

ドババババーン

シュウウウ

爆発の後には大きなクレーターがあり、冷気と熱による水蒸気があがっていた。

「フン、呆気ナカッタナ。」

「そうか？」

「何!？」

蒸気の中から現れたのは胸に稲妻のマークがあり体の輝いたシャインだった。

「さあ、此方も溜め込んでいた光を解放させて貰うぜ。」

「サッキマデノ八本気ジャ無カッタト言ウノカ!？」

「じゃあ早速続きをするか。」

シュインッ!!

「消エタツ!?!」

「光の速さについてこれるかな?」

「光の速さだと!?!」

「じゃあ、いくぜ!?!」

ドッ

「グッ」

速イ!?!

「まだまだ。」

ドッ!

ガッ!

ダッ!

バツ!

殴られ飛ばされそうになれば後ろから蹴られ、
また飛ばされそうになれば反対からなぐられる。
端から見れば動いてない様に見えるだろう、
それだけ動きが速いのである。

「グガッ　グオッ。」

「トドメだ！！」ライトニングナツクル?!?!?!」

「グアアアアアアアア!!?!?!?!」

「ぜ、絶対、復讐シ、シテヤルウウウ!!?!」

タイラントは蒸発して跡形もなく消え去った。

「終わった。」

「ぐっ!?!」

「体がついていけないのか。」

強化形態の“ライトニングフォーム”は凄まじいパワーを発揮するが体に少々堪えるらしい。

「まあいい、そんなことより目的は何か調べなきゃな。」

シャインはそう言って基地に入ってしまった。

エネルギー解放（後書き）

“ ライトニングフォーム？はワンピースのルフィの “ ギア2？^{セカンド}みた
いなものです。（でも命は削ってないよ）

感想等お待ちしております。

基地搜索

「さて、探ってみるか。」

此処はジェロニモンの基地だ。

色々な書類が残っている。

俺はその内の一枚を取って読んでみた。

『この実験体のゼットンには感情を持ち不完全だ、タイラントの模擬戦に丁度良いだろう。』

「俺と戦ったあのゼットンか？」

「続きがある。」

『もう一体の方も感情を持ってはいるが、
凄く潜在能力が高いようだ。』

マイナスエネルギーを流し込めば、かなりの戦力になるはずだ。』

「ゼットンがもう一体居るのか!？」

他のも見ってみるか、

数枚取って適当に見た。

『我々の目的のためにこのマイナスエネルギー増幅装置は有効である。』

「だからマイナスエネルギーが……。」

よしこれらは手掛かりとして本部に持ち帰って調べて貰おう。

俺は其処にあった全ての書類を集めシャインブレスレットにデータ化して入れた。(本当に便利だ。)

こうしちやいられないその装置とやらを破壊せねば。

この部屋は何だ？周りに気味の悪い液体漬けの怪獣の標本が並べられている。

ガサッ

！？

ピロロロロロ　ピロロロロロ

「ゼットン。」

「やはりゼットンか。」

俺は急いで後ろを向くが……いない。

「ん？」

下の方を見ると其処にはなんと小さいゼットンが・・・

「かわいい。」

こう言ってしまった俺は悪くない、マジでかわいい。
でコイツをどうしようか。

トテ トテ トテ トテ

んああ 駄目だ、しょうがない。

「コイツは俺が飼う！！！！！」

いやもうホント耐えられねえ。

でどうやって持ち変えるかな？

「そつだ！ちよつとこれやってみたかたから持って来たんだつた。」

じゃーん 空のカプセル

これに入ればミクラス達のように持ち運び可能になる。
いやぁレイオニクスにちよつと憧れててさ、見つけたからタロウに
ねだって買って貰った。(子供かよ)

「ゼットン、お前俺と一緒に来るか？」

「ゼットン。」

「こうしてゼットンが俺の仲間になった。

「ゼットン、ゲットだぜ……！」

ていつで帰還します。

ってその前にマイナスエネルギー増幅装置壊さなきゃ。

って探すのめんどいから光線技の練習がてらにまとめて破壊するか。

「うおおお……シャイニングシュート……！」

ドッカーン……！！

さて帰還するか。

基地搜索（後書き）

難産です、編集するかもしれない。

帰還

暗闇の中に男が二人向かい合っている。

「惑星シグマの基地が一人の戦士ウルトラマンにやられてしまったんだってなあ？」

「はっ、はいっ申し訳ございません!!」

「まあいい、ゼットンも不完全体になってしまったみたいだからなあ。まあタイラントを失ったのは惜しいがな。」

「次こそは失敗するなよ。その時は・・・」

首を切る動作をする。

「すっ、すいませんでしたあ。次こそは必ず!!」

そう答えてそそくさと出ていく。

「それにしても何故奴が・・・」

男の目線の先のモニターにはシャインの姿が映っていた。

「我々の元に来る筈であったのに・・・」

光の国

「ふうー シャイン只今帰還しました。」

『了解しました。』

「さあ本部に行くか。」

「デュワッ!！」

ビューーーーーン

タンッ!!!!

俺は本部前に着地し、入っていった。

コン コン

「入っていいぞ。」

「失礼します。」

ガチャッ

「おお、シャインじゃないか。」

「久しぶりです、タロウ教官。」

何故久しぶりなのかと言うと、

任務自体は1日だったが行き帰りに3〜4日かかったのだ。

「で、どうだったか？」

「残念ながら、タロウ教官の嫌な予感が当たってましたよ。」

「やはりな、あの急な上昇は異常だから何も無いはずがない。で、原因は？」

「原因はジエロニモンでした。」

「これが奴の基地にあった書類です。」

「目的はゼットンの養育とタイラントを復活させる事です。」

「タイラントを？ 倒して来たのか？」

「はい。」

「そうか、手強かっただろう？」

「はい、しかも途中でジエロニモンを食べてパワーアップしちゃっし。」

「ジエロニモンを食べた？」

「はい、それで勝てそうになかったんで解放しちゃいましたよ。」

「だろうな。」

「で、ゼットンは？」

「2体いたんですけど。」

「2体も！？」

「はい、でも感情を持った不完全体でした。」

「で、片方は基地を探している途中で倒したんですよ。」

「で、もう1体は・・・」

「倒せなかったのか？」

「はい……見て下さいこれ。」

ポンッ！！

カプセルからミニゼットンが出てきた。

「余りにも可愛くて。」

「ピロロロロロ　ゼットン」

それを見てタロウの口があんぐり開いた。

帰還（後書き）

感想を下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7990x/>

ウルトラマンシャイン

2011年11月30日00時54分発行